

# 「板かるたの歴史」

——会津発祥説の検討——

吉 海 直 人

【キーワード】下の句かるた・北海道・室井商店・会津発祥・漢詩かるた

## 一、研究の発端

たまたまNHK大河ドラマをきっかけに、新島八重の生涯を調べていたところ、正月や土曜日の夜分に、新島邸で「かるた取り」が頻繁に行われていたことが浮上した。そのことは「かるた取り」に参加していた複数の男子学生（女子学生の証言なし）が、思い出話として証言していることである。

単に「かるた取り」というだけなら、取り立てて論じることもあるまい。しかし八重が「かるた取り」の名手だったこと、

それだけでなく会津藩の「かるた取り」が、一般的なやり方は異なっていたことがわかったので、百人一首の専門的興味から、あらためて板かるたの歴史について詳しく調べてみることにした。

## 二、会津特有の板かるた

新島邸における「かるた取り」については、例えば卒業生の松尾音治郎の思い出話として、

小生が二十一歳から二十三歳までの間の事である。正月の休暇や土曜日の夜分などに新島先生のお宅で歌可留多の会がよく催された。其の頃の乱暴書生には頗る不似合な会とも見ゆるが、元来奥様の故郷なる会津藩では古来歌可

留多が流行したとの事で、奥様が大名慢であつたからである。当時会津から来校して居た書生が望月興三郎を筆頭に六、七人も居たので、会津人の特技会として同郷人の友誼を厚ふする意味合ひもあつて催されたのである。然るに小生は明石人で会津人で無かつたに拘わらず、奥様から特別の思召で会津人並みの取扱ひを受けたのであつた。それで下手ながら之れに参加したのだが、奥様一人を向ふに廻しても奥様は上手で、いつでも五六人の者が負けたのである。併し蜜柑だの饅頭だのは沢山食べて帰つたが、今日でも其の事が脳底に残つて居て青年時代の事を偲ばせる。

(同志社校友同窓会報六二)

と語られている。ここに「奥様(八重)の故郷なる会津藩では古来歌可留多が流行した」とあるが、特に会津藩で「かるた取り」が流行していたという事実(資料)は仄聞していない。また同志社には、望月興三郎を筆頭に会津出身者が六七人在学していた。その仲間内で「かるた取り」が催されていたことは事実のようである。それにしても「会津人の特技会」という言い回しは気になる。明石出身の松尾音治郎の目には、どのような

「かるた取り」に見えたのであろうか。

そこで別の記事に当たつて見たところ、「かるた取り」が違つた意味合ひをもつて行われていたことが浮上してきた。それは襄の世話をしていた看護婦不破ゆうの証言である。

又上州御病中、「今日は八重さんから大変いい便りがありました……」と仰せになりますから突き進んでお訪ねすると、夫人は会津御出身であられた為め、薩摩の人々と何うも和解せられませんが、到々或る機会に鹿兒島人を招んで、かるた会をせられたと云ふ便りが来たので、「すべての人を愛せよ」と云ふ教訓を絶えず実行して居られる先生は此の和解を大変よろこんで居られたのであります。

(同志社校友同窓会報九五)

上州で療養中の襄に、京都の八重から手紙が届いたらしい。内容は八重が自邸のかるた会に、鹿兒島(薩摩)出身の生徒を招いたことが記されていたようである。それを読んだ襄は、聖書の教訓を八重も実践することができたと云つて大変喜んだ。そのことを間接的に不破ゆうが証言しているのである。

残念なことに、この時の襄宛の八重の書簡は残っていないので、手紙にどのような文面が書かれていたかはわからない。し

かしこれを素直に読めば、八重が薩摩出身の生徒を、ずっとか  
るた会から遠ざけていたという事実が察せられる。八重におい  
ては、戊辰戦争の忌まわしい記憶がなかなか払拭できなかつた  
のだろう。だから会津出身者をおかわいがるのは正反対に、薩  
摩出身者を遠ざけていたということになる。それがここに至つ  
て、ようやく吹っ切れたというのであるから、裏が喜ぶのも無  
理からぬことである。

今のところこの記事を裏付ける資料は他に見当たらないが、  
八重主催のかるた会は、ある意味で会津人の交流の場となつて  
いたことは間違いないさうである。

### 三、生徒達の証言

ではどうしてそれが可能なのであろうか。もう少し別の資料  
に当たってみよう。卒業生の三宅一は「新年廻礼」に、

カルタ好きの人達は新島先生の未亡人の家によく出かけて  
カルタ取をしたが、私は斯云ふ事は余好まなかつたので  
行った事はなかつた。

（『創設期の同志社』149頁）

と記している。ここには「未亡人」とあるので、裏が亡くなつ  
た後も、八重は自邸でかるた会を開き続けていたことがわかる。

もちろん裏の生前も、かるた会は八重がしきっていたはずであ  
る。

同様に児玉亮太郎の「新年廻礼（カルタ会）」にも、

新年には校長宅で学生をカルタ会に招待するのが常であつ  
た。新島未亡人、小崎校長夫人等は斯界の勇将で、其雷鳴  
を轟かし、新島未亡人の如きは特に五六人の敵を一人にて  
引受け、連戦連勝であつた程の名将であつた。

（『創設期の同志社』204頁）

とある。やや誇張も含まれているかもしれないが、八重はかる  
た取りの名手であつたようである。ここでは小崎弘道夫人（岩  
村千代）も「かるた取り」の名手とされている。<sup>(1)</sup> また東郷昌武  
の「旧懐」にも、

在学中何よりも楽しかつたことは、新島未亡人の御邸に催  
さるる、正月カルタ会に招かるることであつた。女学校の  
生徒達と一緒に、パーラーの広間に、八重子刀自が、おか  
らだに似合はぬ、やさしい声で、「声聞く時ぞ秋は悲しき」  
なんて、高らかに読み給ひたる歌に応じ嬉々と、時々は態  
と女生達の手を、引き搔きつつ、遊ばせて頂いたことは、  
未だに顔前に髣髴とする。

（同志社校友同窓会報六一）

とある。これによつて男女交えての「かるた取り」であつたことがわかる。尾崎紅葉の『金色夜叉』を引用するまでもなく、当時の「かるた取り」は、若い男女が夜間でも一緒に集まつて遊ぶことが許されていたので、男子生徒にとつては貴重な女子との交流の場であつたのだろう。

この記事から、八重は「かるた取り」が上手だっただけでなく、読み手の力量もあつたことが窺える。「おからだに似合はぬ、やさしい声」というのは、当時肥つていたということであろうか。ここでいささか気になるのは、「声聞く時ぞ秋は悲しき」と書かれている点である。普通なら「奥山に紅葉踏み分け」と上の句が詠みあげられてしかるべきだからである。それなのにどうして下の句なのかというと、どうやら八重の催していたかるた会で使用されていたが、普通のかるたではなかつたからのものである。そのことは同じく東郷昌武が「新年廻礼」で、

新年に際し最も愉快であり、且つ一年中に大なる楽しみとして居つたのは、新島未亡人に招かれて歌ガルトを取る事であつた。其場所は新島先生の応接室で、可成広い座敷であつた。何時も女学校の人が半分、男学校の方が半数と

云ふ事で、御馳走は寿し、蜜柑等であつたが、殆ど朝より夕近く迄盛んに此歌ガルトをしたものである。

札は板であつたから、其札の爲めに、若しくは相手の爪の爲めに大に手に負傷をせられたのであるが、相手は女学校の生徒であつたから、寧ろ面白半分に女学生の方を引掻きせじ筆つていぢめたものである。同志社在学中、夫人と言葉を接するのは、唯一年中此一日であつた。

（『創設期の同志社』131頁）

と詳しく語つていた。ここに「札は板」とあることに注目したい。一般のかるた札は言うまでもなく紙製である。京都で板製のかるたは、当時珍しいものだったはずである。<sup>(2)</sup>ここでは会津特産とされている「板かるた」を使用していたのであろう。板であれば少々乱暴に扱つても、折れたり破れたりすることはあるまい。

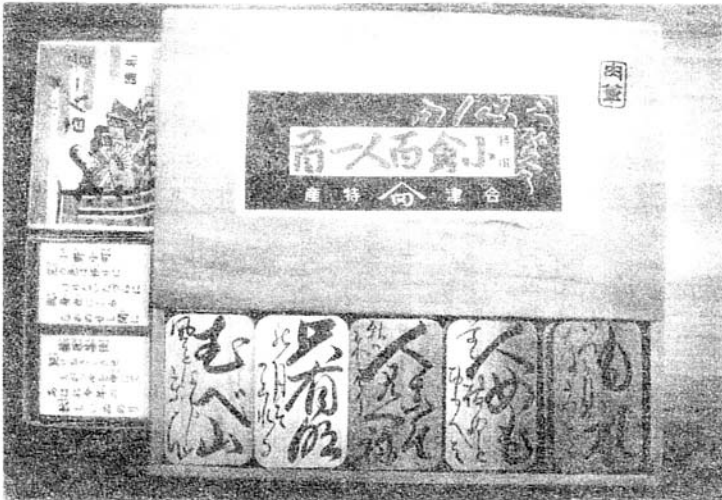
という以上に、新島邸の「かるた取り」は、かなり乱暴なものであったことが窺える。「相手の爪の爲めに大に手に負傷をせられた」・「引掻き筆せじつていぢめた」というのは、かるた取りとして尋常ではあるまい。

#### 四、「板かるた」をめぐる

残念なことに、現在の会津若松市では、板かるたはまったくといっていいほど遊ばれていない（もはや絶滅か）。かろうじて北海道では、今も下の句かるたとして残っているが、それは幕末・明治期に会津藩の人間が北海道に移住した際、一緒に持ち込まれたからと説明されている。

しかしながらこれまでは調査不足もあって、会津特産という確かな証拠（現物）は提示されていなかった。そのため板かるたの研究論文は見当たらず、唯一、高橋浩徳氏「下の句かるた（板かるた）について」大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要8・平成十八年三月が存するくらいである。ただしこれは遊戯法を主としたもので、板かるたの歴史に関しては、宮野勝氏「下の句かるたの由来」全日本下の句歌留多協会ホームページがもっとも参考になる。

ところが「八重の桜」効果というのか、最近、古い板かるたに注目していたところ、箱に「会津特産」と明記された商売物の板かるたが見つかった（図版1）。それだけでなく会津若松の室井商店が、北海道向けに板かるたを商っていたこともわ

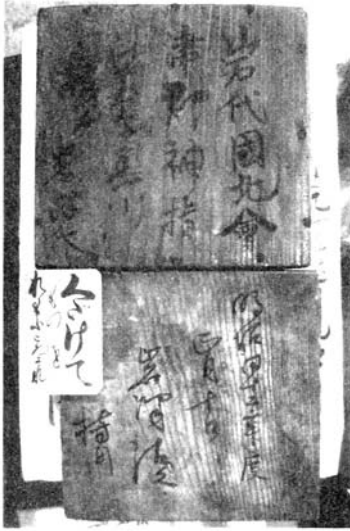


図版1 会津特産板かるた

かつてきた。

遡って明治時代の板かるたは、手書き・手作りのものがほとんどだが、箱に所蔵者の名前や住所・制作年などが記されている場合も少なくない。そういった情報によれば、会津はもとより白河・米沢・天童・宮城・越後でも古い板かるたが見つかっている（図版2）。これによって、会津周辺で板かるたが遊ばれていたことがほぼ証明された。一説によれば、朴の木の余り切れを使っていたそうである。

さらに八重の調査に活用した「会津会雑誌」を調べてみると



図版2 明治四十二年の板かるた

ころ、板かるたに関する記述が複数見つかった。まず雑誌三十二号（昭和三年七月）の「京都会津第二回例会兼新年互礼会」に、

〔板歌留多争覇戦を本堂に開く。老も若も教組に入り乱れて相闘ふ。此の日新城博士対奥田將軍の対戦は殊に目覚ましかりき。戦闘半ばにして記念撮影をなす。〕

と出ていた。続いて一年後の会津会雑誌三十四号（昭和四年七月）の「新年互礼会」にも、

〔会津独特の下の句を読み下すの歌かるた遊に歓を尽して、散会したのは電灯の点ずる時刻でありました。〕

と記されていた。ここにわざわざ「会津独特の下の句を読み下すの句をとる」という競技法の説明が記されていることに注目したい。同様のことは会津会雑誌三十六号（昭和五年七月）の「新年例会」にも、

〔食事が終ると歌がるた遊び、それもお国ぶりを發揮して、下の句を読んで下の句を取る競技を四五人づゝに別れ二ヶ処で戦ひましたが、新島刀自も参加せられ、新城帝大総長もこの日は昔の学生の元気に立かへつて勇敢に戦はれました。とても強くて新城さんの傍によりつく好敵手は〕

若人・年寄の中誰一人もありません。奥田將軍の読みと来たら天下一品、これまた他の追隨を許さぬ技倆を有つて居られます。

とあつた。ここにも「お国ぶりを發揮して、下の句を読んで下の句を取る競技」と説明されている。また「四五人づゝ、別れ」とあることで、一対一ではなく団体戦を行つていたことがわかる。しかもこの日のかるた取りには、八十四歳の八重も参加しているが、さすがに老齡には勝てず、往年の強さは披露できなかつたようである。ここでは京都大学総長の新城博士が目立っていた。また「奥田將軍の読みと来たら天下一品」とあるが、一体どのような読みだつたのだろうか。

ついでに『同志社ローマンス』の記事もあげておこう。

御年始がすむと、カルタ取り、大抵新島未亡人から招かれ、女学校の方と半々、年に一どの男女混淆の遊び、板のきず、爪の跡、随分激戦をやつた。未亡人は会津式の板カルタでは、五六人を相手に連戦連勝の功を独占せられる。昔会津落城の時の凜々しい面影を偲ぶのは、此時に限る。小崎校長夫人も、亦カルタに於ては、斯界の勇將と、雷鳴噴々であつた。

ここに「五六人を相手に」とあるのは、一対五(六)ということであろうか。板かるたの最大の特徴は、下の句を読みあげて下の句札を取り合うことである。そのため「下の句かるた」と称されている(普通のかるた取りは「上の句かるた」)。要するに上の句を無視して下の句から読みあげるのので、必ずしも歌を暗記していなくても、「いろはかるた」のように読まれた札にすぐに反応できるのである。

しかも今と違つて荒っぽいものだったようで、先に札に手を触れたくらいでは自分の取り札とはならず、かなり激しい奪い合いが当たり前だったらしい。座布団の下に入れる、あるいは膝の間に入れるまでは、互いに奪い合うことが許されていたらしい。「引つ掻き傷」云々の話も、板かるただから出てくるのである。

こういった特殊な板かるたとなれば、必然的に会津出身者の連帯を深めることができたはずである。逆に会津以外の人にとって、板かるたは珍しかったはずだし、「下の句かるた」というルールに馴れていない人は、たとえ「かるた取り」に参加できたとしても、かなり戸惑つたに違いないからである。

会津出身の八重の「かるた取り」は、板かるた・下の句かる



たという地方色を有したものであった。「かるた取り」においても、八重は会津を引きずっていたのである。

## 五、板かるたの歴史

板かるたに関する記述をいろいろ調べてみたが、会津における板かるたの紹介記事（研究論文）は見当たらなかつた。そうすると八重の「かるた取り」の記録は、板かるたの資料としても貴重なものと言える<sup>(3)</sup>。

これで調査は行き詰まりかと諦めかけていたところ、朗報が飛び込んできた。『会津若松市史』に貴重な記録があることが、北海道の板かるた関係者（宮野勝氏）から知らされたのである<sup>(4)</sup>。そこで早速現物に当たってみた。まず『会津若松市史』上巻（昭和十六年）に「第五節 歌留多」という項目があり、そこに、

昔時は殿中奥方にて、字賛かるたと称して、人物の上にな種々の古歌を書せしを用ひたり。後ち士庶を問はず、小倉百人一首の歌を書せしを用ふ。何れも厚紙製なり。字賛かるたは頗る美麗にして、一組二百枚、別に読本一部を添ふ。近世に及んでは、百人一首のかるたは紙製を廃し、朴板に

して之を造り、且つ歌の頭字を大書して見やすからしめたり。対列競技する時は、其板相触れ、憂然として声あり。或は躍り上り時として天井を打つことありて、転た<sup>え</sup>勇壯の態を呈す。陰暦の新年には男女相集りて競合し、曉に達するを常とす。但し会津の歌留多は下の句を読み下下の句を採る習ひなり。戊辰前藩士間には詩かるたと称し、唐詩選の五言起承二句を楷書にて記せしものありしが今は廃れたり。

と出ている。「字賛かるた」とは、どうやら高価な「肉筆歌かるた」を指すようである（「白讀歌かるた」もあるが、これに歌仙絵はない）。「読本」は「添本」ともいい、上の句札では下の句まで読めないため、これを利用して下の句を読みあげることで、「かるた取り」を行ったのであろう。

「近世に及んでは」とあることから、最初の「昔時」を近世以前と考へたくなるが、そもそも百人一首かるたが成立したのは近世に入ってからであるから、これはむしろ「近世後期以降」と見た方がよさそうである。「紙製を廃し、朴板にして之を造り」とあるのは、必ずしも全国的な状況ではなく、会津における独特の傾向であろう。和紙が高価だったからというより



も、身近にある材料を活用したのではないだろうか。また「歌の頭字を大書して」とあり、それがそのまま北海道の板かるたにも継承されているようである。しかも「但し会津の歌留多は下の句を読み下すの句を探る習ひなり」とあるように、会津が「下の句かるた取り」であったという特徴も銘記されていた。

さらに『会津若松市史22』「職人の世界」（平成十四年）のコラム「侍の内職」には、

そのような中で今では失われたものの一つに板カルタがある。森林資源に恵まれた会津独特のもので、重箱やお盆製作の際に出る端材の朴板を使用したものである。この朴板に小倉百人一首を墨書する。上の句、下の句がそれぞれに記され、下の句を読み、上の句のカルタを取り合うという、普通とは反対の遊び方をする。これは文化文政（一八〇四～二九）頃に武家や商家で始まったと伝えられる。昭和の初め頃までは商家で盛んであったと言われるが、今ではほとんど行われなくなった。ところが北海道では今でも板カルタでカルタ取りが行われている。会津産板カルタが海を越えて北海道まで移出されていた名残である。本家では廃れても幸いにも大切にされていたのである。（9頁）

とあり、板かるたの図版まで掲載されていた。話の流れでは、武士の内職として板かるた作りが行われていたことになる。ただし「下の句を読み、上の句のカルタを取り合う」というのは尋常ではない。相当の上級者ならともかく、初心者ではかなり困難な遊び方であろう<sup>6</sup>。どうやらここには誤解が生じているらしい。

またここでは板かるたの成立を文化文政頃としているが、その根拠（資料）は示されていない。そもそも「上の句、下の句がそれぞれに記され」とあるのだから、これは単に板札で百人一首を作ったに過ぎない。前述のように、下の句かるたにおいては上の句札は読み札として機能しない。要するに初期の板かるたは通行のかるたであって、決して下の句かるたではなかったことになる。

『会津若松市史』の板かるたは、下の句かるた取りというところで、下の句を読んで下の句が書かれた板かるたを取るという説明になっている。それがいつから始まったのかは記されていないが、その遊び方は既に会津では廃れ、北海道に伝承されて現在も残っている。

## 六、幻の漢詩かるた

板かるたの歴史がだいぶ明らかになってきたが、それによって新たな課題も浮上してきた。前述の『会津若松市史』上巻の末尾に「戊辰前藩士間には詩かるたと称し、唐詩選の五言起承に（二）句を楷書にて記せしものありしが今は廃れたり」とある点がそれである。

もともと江戸時代において、仮名は女性・漢字は男性が修得した。その流れで女性は百人一首、武家の男性（少年）は漢詩かるたで遊んでいたと考えられる。要するに男性と女性は別々にかかるたで遊んでいたわけである。もちろんそれは会津だけの特長ではあるまい。江戸時代においては、全国の藩で同様のことが行われていたと思われる。

というのも江戸後期には、木版の漢詩かるたが複数刊行されているからである。「唐詩選」を利用したものとして、唐詩選所収の五言絶句七十四首をかるたに仕立てたものもつとオースドックスだった。五言絶句を二分し、上の句札と下の句札に仕立てると、七十四組百四十八枚の詩かるたとなる。また七言絶句だと百六十五首なので、百六十五組三百三十枚の詩か

るたができる。それを精選して四十八詩（九十六枚）あるいは百首（二百枚）のかるたに仕立てられたものもあるようだ（図版3）。

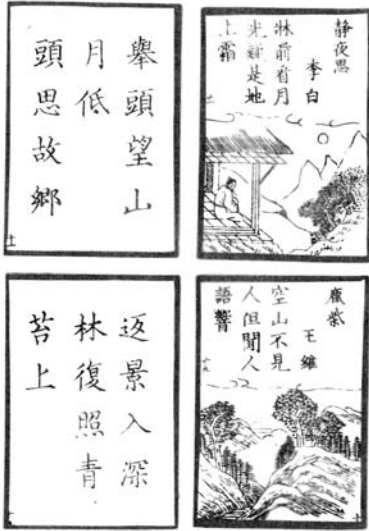
出版目録によれば、天明七年十二月に「唐詩選かるた（七言絶句五十首）」が刊行されている。当時、「唐詩選」が流行しており、天明期には絵入りの「唐詩選画本」もかなり出回っていた。そういった「唐詩選」流行の影響が、かるたにまで波及したというわけである（図版4）。もちろん寺子屋でも「唐詩選」を教えていたので、そういった子供達の学習用遊戯具としての



図版3 木版唐詩選かるた

役目を担っていたのかも知れない。

また松平定信が寛政の改革を施行した際、藩士の子弟に唐詩選かるたを奨励したとされている。現在、唯一詩かるたが伝承されている三重県桑名市の鎮国守国神社では、文政六年（一八二三年）に白河藩主松平定永が所領替えて移ってきており、その際に会津の漢詩かるたが桑名藩に将来されたと言いつたに伝えられている。現在行われている桑名の詩かるたは紙製であるが、もつともオーソドックスな七十四組百四十八枚の詩かるた（唐



図版4 木版絵入唐詩選かるた

詩選)であった(図版5)。

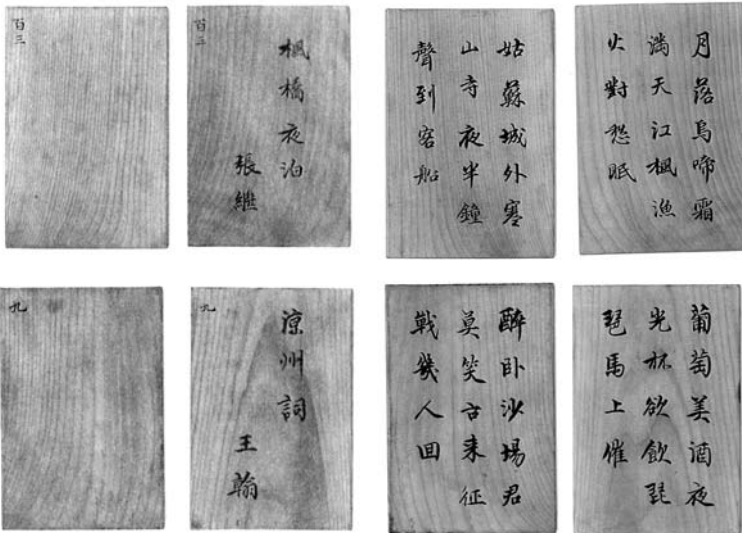
しかも「けんかかるた」と称されるように、壮絶な奪い合いが「かるた取り」の醍醐味となっているとすることで、そのことも会津の板かるたの伝統を継承していると思われる。残念なことに板製の漢詩かるたは、ほとんど伝わっていない。私の手元にあるのは、七言絶句百六十五組(三百三十枚)であるが、薄く作られた高級品であり、丈夫な板かるたとは異なる仕様のもののである(図版6)。一方、紙製肉筆の漢詩かるたはかなりの数が現存しているが、これまでほとんど注目されていなかった(8)ので、詳しい調査はまだ行われていない。

なお漢詩かるたであるから、その起源として中国起源説も想定される。しかしながら、中国に古い漢詩かるたの記録は見当たらないようである。かつては漠然と中国から将来されたというだけで、文禄頃の漢詩かるたの存在が取りざたされたこともあったが、どうやらそれは文政の誤りだったらしい。

今のところ漢詩かるたは、日本起源でよさそうである。その成立は明和以降と考えられる(9)。また松平定永が桑名藩主となった文政六年が、桑名の詩かるたの起源となっている。もちろん会津では、それ以前に遊ばれていたはずだが、戊辰戦争ですべ



図版5 紙製漢詩かるた



図版6' 漢詩板かるた (裏)

図版6 漢詩板かるた

ては灰燼に喫したのかも知れない。

なお幸田文の随筆「ずぼんぼ」(『父・こんなこと』新潮文庫)には、幸田露伴が唐詩選かるたを読みあげているくだりが描かれている。

つぎには唐詩選のかるたを持ちだした。これには青年組が総退却をし、父は父で読んで行くうちにだんだん興に乗って吟じだしてしまふというわけで、これはまるで勝負にならなかつた。(187頁)

露伴なら唐詩選くらい覚えていたであろうが、それにしても唐詩選かるたが遊ばれていたという貴重な資料であろう。

## 七、上の句板かるた

板かるたを追跡していて、その成立が天明から文政あたりに絞り込まれてきた。なんとこの時期は、「いろはかるた」や「花札」の成立時期とも重なっている。どうやらこの時期、かるたの世界が大衆化していったようである。

ところで現行の板かるたの場合、板は取り札だけで、読み札は普通の紙製のものが用いられている(読み本でもかまわなない)。上の句まで板かるたになっているものは、ほとんど報告

されていない。しかしながら漢詩かるたは、紙も板も上の句まで作られているのであるから、百人一首の板かるたも板製の上の句があつてしかるべきである。

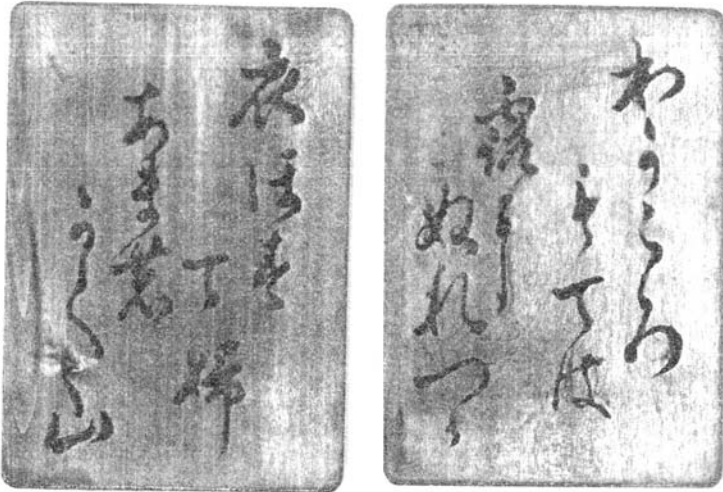
幸い兵庫県の大森啓子氏が板かるたを収集されているとの情報を得て、早速拝見させていただいたところ、なんと二組の古い板かるたが上の句も板で作られていた(図版7)。しかも現行の板かるたと違って、非常に薄く作られていること、また歌の頭字も大書されておらず(図版8)、単に紙製のかかるたが板製になつていただけのものであつた。<sup>(10)</sup>

おそらくこちらの方が正統というか古い形態を留めているのであろう。そうなると近世後期の板かるたは、漢詩にしろ百人一首にしろ、薄手の板に上の句と下の句が別々に書かれており、単に材質が板であるという以上の違いはなかつたと思われ<sup>(11)</sup>。

しかし薄手の板では割れやすいので、丈夫にするには厚めの方がいい。まして教養というか歌の暗記によるハンディをなくすためには、上の句から詠みあげず、いろはかるたのように下の句を読みあげれば、一斉に札を取りにいける。となると、最初は普通に上の句から詠まれていたものが、途中で上の句を省略してすぐに下の句を詠むようになったのであろう。



図版7 上の句・下の句揃いの板かるた



図版8 薄手の下の句板かるた



この考えが正しければ、下の句かるたはまだ百人一首を暗記していない幼少の子女の遊び（いろはかるたと同レベル）として始まったことになる。だからこそ次のような批判的な見方も出るわけである。

### ●歌かるた会

松の内の遊戯―双六、絵合、貝おほひ等は一部上流の奥殿に古の面影を存するのみにて広く世間に行はれず。上下貴賤老幼打交りて殊に多人数を共にし優雅にして趣味あるは歌「かるた」会に若くものなし。この遊戯は娯楽の中に我邦神ながらの道なる和歌をおほゆる益ありて帝国内至る処「秋の田の」の御製を知らざるものなきは実に此遊戯の賜なることは何人も疑はざる処なるべし。然るに本道に行はるる歌かるた会を見るに熟れも下の句のみを読み下下の句を取るに過ぎずして言は、片輪の「かるた」会なり。上の句より読み下下の句を取ればこそ、「かるた」会も面白けれ。下の句を読み下下の句を取る、其間何の面白味娯楽のあるべき。又これでは三十一文字の風体姿調をおのづから感得する利益をも失ふ道理なり。

（北海タイムズ・明治三十六年一月一日）

北海道の板かるたが新聞に掲載されたのは、明治三十六年のようである。実はそれは競技かるたが全国組織となり、全国大会が開催された時期とほぼ同時期であった。競技かるたの隆盛が刺激となって、北海道でも賞金付きの大会が開催されるようになったのではないだろうか。もともと女性の遊びであったが、日露戦争と結びついたためか、一気に男性の遊びに転換している。だからこそ賞金というかギャンブルの要素が加わったのであろう。

その時期に、歌の頭を大書するという下の句かるた特有の取り札が広まったのではないだろうか。ただし書き出しを多少太字にするというのは、既に幕末・明治頃の安価な百人一首かるたでも認められる傾向である。

### 結

以上、八重が「かるた取り」の名手であったことをきっかけに、会津特有の板かるた・下の句かるたの歴史を明らかにしてみた。そこからさらに漢詩かるたも板かるたで作られ、藩士の子弟が遊んでいたことを考察してみた。

惜しいことに、その二つとも現在の会津では既に廃れている



が、板かるたは北海道（樺太も）に将来されて現在も遊ばれており、また詩かるた（紙製）は白河藩経由で桑名にもたらされ、かろうじて命脈を保っていることがわかった。

そうなる与会津は、板かるた・漢詩かるた発祥の地と言えうである。その上で話を八重に戻すと、八重が主催したかるた会では既に下の句かるた方式になっていたらしい。仮に八重が若いときに下の句かるた方式で遊んでいたとすると、既に幕末には成立していたことになる。日向ユキの回想では、下の句かるたと特定できないので、取りあえず現時点ではその可能性を指摘するに留めたい。

## 〔注〕

(1) ただし小崎夫人（岩村家）は幕臣の娘なので、いつどこで板かるたを修得したのか気になる。これは板かるたが上手というだけではなく、普通の「かるた取り」が上手ということではないだろうか。おそらく新島邸では、板かるたのみならず普通の「かるた取り」も行われていたのであろう。

(2) 板製かるた自体は、江戸時代から作られていたが、薄く作つてある高級品がほとんどだった（適翠美術館所蔵の板かるたがその典型）。それに対して明治以降の板かるたはかなり厚

めであり、相当乱暴に扱つても割れないようにできている。なお新島会館への寄附物品目録の中に、「木製歌かるた（先生自筆）」が出ている（追悼集IV 305頁）。

(3) 日向ユキの回想には、「正月には歌がるたとりが賑やかでございました。何年も大掃除などしたことがなかったのでございましょうか、かるたをとると畳の埃で顔も手も真黒になりました。」（宮崎十三八氏「ある明治女人の記録」歴史春秋九・一九七七年五月）と記されている。おそらく下の句かるたであろうが、板かるたであることは記されていない。

(4) 中村北潮の「肉筆板かるた」を手掛けている井上圭司氏が、北海道旭川翼歌留多倶楽部会長の宮野勝氏から受け取つた調査資料による。その中には北海道新聞昭和四十年十二月十四日に掲載された「北海道式百人一首由来」、同昭和六十二年十二月二十四日夕刊に掲載された「板歌留多と戊辰戦争」の記事も含まれている。

(5) 好川之範氏は北海道新聞昭和六十二年十二月二十四日夕刊で、「江戸期以前の殿中奥方では人物の上に古歌を書いた紙札の「字賛かるた」なるものを取り合っていた。」と述べておられる。

(6) これは単なる誤植ではなさそうである。『日本社会事業三版』（明治四十年）の「カルタ」項中の「詩がるた」に、「歌かるたは百人一首を通例とし、古今集、源氏、伊勢物語など種々

ありて、各々其の歌を讀するの便に、之を弄ぶものなり。漢学の隆盛なる藩々にては、唐詩選、三体詩などを、上半首と下半首と分ちて記し、上の句を讀みて下の句を取り、又は下の句を讀みて上の句を取る拵、勝負の遊びを為す間に、詩を暗誦するの稽古として作り用ひたり。」とあるので、これを百人一首にも適用したのである。

(7) 吉海直人「かるた」資料としての出版目録「同志社女子大学大学院文学研究科紀要六・二〇〇六年三月には、「明詩かるた(五十詩)」「(明和三年二月刊)・「唐詩選かるた(七言絶句五十首)」「(天明七年十二月刊)が掲載されている。

(8) 古書目録では、「關牌カルタ」(七十四組百四十八枚)、「漢詩かるた」(三百三十枚)、「漢詩かるた」(三百四十八枚)、「唐詩選かるた」(百五十九枚)、「漢詩かるた」(文政六年、七十三枚揃)、「漢詩カルタ」(五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首)、「唐詩選カルタ五七言絶句」、「唐詩品彙詩骨牌」(八十三枚揃)、「唐詩五絶かるた」(百四十八枚)などが出品されている。また山口泰彦氏『最後の読みカルタ』には、

「詩歌留多」(天保十二年作、三百四十枚)が紹介されている。山口吉郎兵衛氏『うんすんかるた』の「詩カルタ」には、

(9) 「和歌の外に男子向として唐詩選等の詩集より五言、七言絶句を採った「詩カルタ」が上は雲上やんごとなきあたりより下は市井の有識階級に亘って行われた」と説明されている。さらに「新院道晃御両吟千句」(寛文十一年)や「人倫訓蒙図彙」(元禄三年刊)を引用して、近世前期に既に存したであろうことが示唆されている。古く高級な詩かるたが工芸品として製作された可能性もあるが、一般に広く流布したのはやはり江戸後期であろう。

(10) ただし二組とも、作者名は上の句札の裏に独立して書かれており、その点特徴的である。もちろん紙製かるた(肉筆)にも同様の形態は存する。

(11) 大河ドラマ「八重の桜」での板かるたシーンでは、普通の読み札が用いられていたが、当時の読み札には上の句しか書かれていないので、それで下の句を讀みあげることができない。むしろ取り札を讀み札に利用するのであれば問題はない。